



(上)シナノキ
(右)城北小学校様のコカリナ作り体験

栗橋南小学校様の魚のつかみ取りをお載せする予定でしたが、うまく撮れていませんでしたので割愛させていただきます。お詫び申し上げます。

志賀高原の歴史-3 昭和・平成

昭和の初期、スキーの人気は少しずつ広まり第1期のスキーブームが始まりました。国も外貨獲得のための施策として国際スキー場を指定することとなりました。昭和10年志賀高原は妙高、菅平と共に、他地区との激しい指定獲得競争に勝ち、鉄道省より上信越国際スキー場の指定を受けました。之を受けて、当時、蚕糸業の不況で徹底的な打撃を受けていた長野県は、県内経済の活性化策はスキー客の誘致と観光振興以外にないとの考えから、昭和9年には長野県観光協会が創立され、15年には県土木部内に観光主事がおかれるようになりました。そして、昭和12年外国人の宿泊可能な宿舎を丸池に建てようと、京都ホテルに依頼して国際観光ホテルを建てました(現志賀高原ホテル記念館)。当時、志賀高原には9軒の旅館・ヒュッテがあり、収容合計1290名、又、宿泊代は1泊3食1円20銭～1円50銭でした。

国際スキー場の指定を受けた志賀高原の名は国内は元より、海外まで知られる所となり、地元民の間では冬季オリンピックを開催しようという気運が高まりつつありました。しかし、第1回目のオリンピック招致の夢はもろくも崩れ、国内候補は札幌に決まりました。

この頃から昭和9年の日大工科山の家を始めとして、11年には文藝春秋社ヒュッテ、12年には京大ヒュッテ、13年には東京女子高等師範学校志賀高原体育運動場(現御茶の水女子大山の家)、14年には東京歯科医専杖痕クラブヒュッテ、15年には日本医大ヒュッテ、住友山寮、安田銀行山寮等々が開設され、大学生を中心に都会の大手企業の方の利用が増えて参りました。スキー客の増加により、地元受け入れ旅館の数も増加し、昭和20年には39軒の旅館、寮が営業しておりました。又、16年には宿泊業の団結を目途として志賀高原旅館組合が結成されました。

昭和20年、終戦を迎え、志賀高原には進駐軍が入り丸池スキー場と志賀高原ホテルが接收されました。進駐軍は丸池スキー場にスキーリフトの架設を命令し、昭和22年1月、札幌の藻岩山と並んで、日本最初のスキーリフトが完成致しました。当時は、リフト利用は勿論、スキー場利用も日本人は出来ませんでした。

昭和23年頃より、戦地から復員した人や杓野の次男、三男の間で志賀高原への進出を考える人が増え始めました。昭和24年9月7日には15番目の国立公園、上信越国立公園として指定を受けました。そして昭和25年には丸池から発哺までの夏季バス路線が開通等々、冬だけではなく、夏のキャンプ場の整備もされ、志賀高原は避暑地としても、全国に知られる所となりました。

昭和27年、進駐軍が撤退となり、スキーリフトは長野電鉄に引き継がれました。戦後の貧しさから脱し、経済の明るい見通しが付き始めた昭和28年頃から、特にスキーリフトを利用して同じ斜面を何度も滑るゲレンデスキーが主流となり、スキーの人気は一段と高まってきました。

昭和30年、第2期のスキーブームの到来です。志賀高原では地元民によるスキー場開発が始まり法坂スキー場が開業。31年には木戸池スキー場、ジャイアントスキー場が開業し、ジャイアントスキー場では昭和32年第35回全日本スキー選手権大会が開催されました。又、同年熊の湯スキー場が開業、33年には横手山スキー場が開業、34年には上林にジャンプ台が完成し翌年には第15回国体冬季大会開催されました。

昭和35年には、蓮池～発哺に志賀高原ロープウェイが、発哺～東館山山頂まで東館山空中ケーブルが完成。又高天ヶ原スキー場も開業。昭和38年には一の瀬ダイヤモンドスキー場が翌39年には一の瀬ファミリースキー場が開業致しました。その後、44年に奥志賀高原スキー場の開業と之に合わせての冬季の蓮池～奥志賀バス路線が開通。翌45年には寺子屋スキー場が開業、そして58年には焼額山スキー場が開業とスキー客の増加に合わせて次々とスキー場の開発が進み、平成元年時には21のスキー場に旅館・ホテルが106軒、寮・山の家が80軒、1日の最大収容が30000人と、昭和10年には12月20日～1月10日のスキー客が4000名であったものが、平成元年には年間350万人の入りこみ客で賑わう国内最大級のスキーリゾートに発展致しました。その間、37年には2回目のオリンピック招致が行われましたが、この時も札幌が戦時中で開催出来なかったことから札幌に決定致しました。その後、数回のワールドカップを経て、平成10年には、半世紀の悲願である長野冬季オリンピック大会が開催され、志賀高原では、スノーボードの大回転競技とハーフパイプ、アルペンの大回転、回転の競技が行われました。

志賀高原における開発の歴史は正にスキーの発展の歴史にリンクしております。昭和初期～昭和30年前までのツアースキーの発展。昭和30年～のスキーの大衆化、42年～の旅行業者による会員募集の始まり、47年～の大学生の学生ツアーの募集とスキー修学旅行の始まり等々、多くの皆様のご来山により志賀高原は今日を迎えており、特にスキー修学旅行は、平成元年のピーク時よりは減少したものの、現在でもシーズン延べ220000人泊を超え、志賀高原における生命線となっております。(次号へ続く)